ティディム・チン語の示差的 A 標示*

周　杜海 (東京大学大学院)
zhouduhai.skad@gmail.com

1.　はじめに

ティディム・チン語は主にミャンマー連邦共和国とインド共和国において話されているチベット・ビルマ諸語である。本稿はティディム・チン語における示差的 A 標示について記述し、それを引き起こす要因を分析する。

まず、ティディム・チン語の基本となるアラインメントは能格・絶対格型である。

(1)　*lian³*　*in³*　*an¹*　*ne:¹*
PN　ERG　食事　食べる I
「リャンが食事をする」 (Otsuka 2014: 214)

(2)　*zu¹sa:¹*　*ta:i²*
鼠　走る I
「鼠が走る」 (Otsuka 2014: 214)

例 (1)(2) で示したように、ティディム・チン語の他動詞節の主語は能格標識 *in³* によって標示され、他動詞節の目的語と自動詞節の主語は絶対格（無標示）で標示される。

しかし、他動詞節の主語に選択的な能格標識が現れることがある。

(3)　*a¹maʔ³*　*(in³)*　*in¹*　*nei³*
3SG　ERG　家　持つ I
「彼（女）が家を持つ」

例 (3) では、主語の「彼（女）」に対して、能格標識を省略することができる。この現象は示差的項標示と呼ばれる(Witzlack-Makarevich & Seržant 2018)。特に、ティディム・チン語の場合、示差的項標示は他動詞節の主語 (A) に現れるため、ここでは示差的 A 標示と呼ぶ。

示差的 A 標示はティディム・チン語では重要な課題である。まず、示差的項標示自体は通言語的に見られ、主語や目的語に限らず多様な項に、多様な要因によって現れることができる。特にチベット・ビルマ諸語の主語標識の出現は時制、他動性、意志性と弁別の必要性といった要因が相互に関わることが観察され、複雑である(Chelliah 2017)。同様に、ティディム・チン語においても示差的 A 標示に様々な要因が関わっている。そのため、本研究は、チベット・ビルマ諸語のティディム・チン語を対象にして、示差的 A 標示、つまり選択的に現れる能格標識とその要因について記述する。

その結果、本稿はティディム・チン語の示差的 A 標示に有生性・受影性・意志性と 3 つのパラメータが関与していると主張する。この 3 つのパラメータは相互に絡み合っており、単独のパラメータで能格標識の出現に決定づけないが、Hopper & Thompson (1980) が定義した他動性の概念で統合することができる。さらに、この 3 つのパラメータはティディム・チン語の示差的 A 標示に弁別機能と同定機能が両方働いていることを示す。

本稿の構成は以下となる。2 節ではティディム・チン語についての背景を紹介する。3 節ではティディム・チン語の示差的 A 標示を有生性・受影性・意志性のパラメータから記述する。4 節ではこれらのパラメータを他動性と機能の側面から分析し、5 節では本稿をまとめる。

* 本稿は以下の方から有益なコメントをいただいた：石川さくら、佐近優太、鈴木唯、谷川みずき、長屋尚典、林真衣、松瀬育子、水野庄吾、吉田樹生（敬称略）。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。

2. 背景

ティディム・チン語 (ISO 639-3: tcd) はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派クキ・チン語支北部チン語群に属する言語である (西田 1989: 995)。主にミャンマー連邦共和国チン州・ザガイン地域およびインド共和国アッサム州・マニプル州南部・ミゾラム州北部で話されており、話者は約 411,000 人いる (Eberhard et al. 2019: 122, 274)。

ティディム・チン語の音節構造は $(C_1)V(C_2)/T$ であり、多くの語は単音節語である。声調は上昇調、中平調、下降調と 3 つがあり、本稿ではそれぞれ上標の 1、2、3 によって表す (大塚 2011: 66)。

そして、前述したように、ティディム・チン語のアラインメントは能格・絶対格型である。ティディム・チン語の他動詞節主語は *in³* という能格標識によって標示され[1]、他動詞節目的語と自動詞節主語は絶対格によって標示される。

さらに、ティディム・チン語の多くの動詞は形態統語論によって交替可能な二つの形式を持つ。本稿は形式 1 の動詞に I をつけ、形式 2 の動詞に II をつけるようにする (大塚 2011: 214-217)。

本調査のデータは筆者がティディム・チン語の母語話者であるチンガイリャン氏に対して聞き取り調査を経て得られたものである。チンガイリャン氏はティディム・チン語とビルマ語を母語とするバイリンガルであり、日本語も不自由なく運用できる。

3. ティディム・チン語における示差的 A 標示の要因

本節では、ティディム・チン語の示差的主語標示の要因として、有生性・受影性・意志性について例を挙げながら説明する。これらの要因はその他のチベット・ビルマ諸語においても示差的主語標示に現れており(Chelliah 2017)、本稿の調査にも示差的 A 標示に貢献していることが観察された。

3.1. 有生性

ティディム・チン語の示差的 A 標示の現象において、有生性が重要な役割を担っている。まず、主語が人間、目的語が無生物の場合、能格標識は随意的である。

(4) *a¹maʔ³ (in³) tʰu¹ tuam²tuam² tʰei³*
3SG ERG こと 色々 知る[I]
「彼はいろいろなことを知っている。」

例文(4)が示すように、人間である主語 *a¹maʔ³*「彼」が無生物の目的語 *tʰu¹tuam²tuam²*「いろいろなこと」に対して、能格標識をつけることもつけないことは可能である。

しかし、目的語が有生性の高い人間である場合、能格標識が義務的である。

(5) *a¹maʔ³ *(in³) a¹maʔ³ tʰei³*
3SG ERG 3SG 知る[I]
「彼は彼女を知っている。」

例文(5)では、目的語が人間 *a¹maʔ³*「彼/彼女」である場合、能格標識をつけることが義務的である。従って、主語が人間で、目的語が無生物の場合、能格標識が随意的であることがわかる。

主語は非人間有生物、目的語は無生物の場合においても、能格標識が随意的である。

[1] ティディム・チン語の能格標識 *in³* はしばしば前置される名詞と融合する。例えば、*a¹maʔ³* が *in³* と融合した融合形は *a¹man³* になる。本稿では表記の便宜上、口語では融合形となっているものでも、名詞を能格標識と分けて表記する。

(6) *tua²* *ui¹* *(in³)* *toʔ³* *zoːŋ²*
DEM 犬 ERG 鍵 探す I
「その犬が鍵を探している。」

例文(6)では、主語が非人間有生物の *ui¹*「犬」であり、探されるアイテム *toʔ³*「鍵」は無生物の場合、能格標識は義務的ではない。
しかし、目的語が有生物である場合、能格標識が義務的である。

(7) *tua²* *ui¹* **(in³)* *aˈmaʔ³* *zoːŋ²*
DEM 犬 ERG 3SG 探す I
「その犬が彼を探している。」

例文(7)では、探される対象が有生物の *aˈmaʔ³*「彼/彼女」の場合、能格標識は必須である。
さらに、主語が無生物の場合、目的語の有生性に関係なく、能格標識が省略できる。

(8) *tua²* *suaŋ¹* *(in³)* *aˈmaʔ³* *su³-xaː¹*
DEM 石 ERG 3SG ぶつかる I-当たる I
「その石が彼にぶつかった。」
(9) *tua²* *suaŋ¹* *(in³)* *siŋˈguːn¹* *taːi²-suk³*
DEM 石 ERG 木 ぶつかる I-DIR
「その石が木にぶつかった。」

例文(8)では、主語が無生物である *suaŋ¹*「石」で、目的語は人間である *aˈmaʔ³*「彼/彼女」の場合、能格標識は選択的である。しかし、目的語が無生物の *siŋˈguːn¹*「木」の場合、例文(9)で示されるように、能格標識も選択的である。これは主語が人間や非人間有生物の場合とは異なる結果である。
このように、主語が有生物であり、目的語が無生物の場合、能格標識が随意的で、目的語が有生物である場合、能格標識が義務的であることが示された。ただ、次小節で示すように、目的語の受影性によって、目的語が有生物の場合でも、能格標識が随意的なことがある。

3.2. 受影性

受影性は、目的語が他動詞節において動作に移転される程度を指すが(Hopper & Thompson 1980: 252-253)、変化を被る主題参与者と変化を測るスケールの間の関係と定義されることもできる(Beavers 2011)。さらに、受影性は他動詞節の格配列に影響を与えることはすでに知られているが(Tsunoda 1985)、本稿は受影性がティディム・チン語の他動詞節にどのように働くかを記述する。

表 1 二項述語の階層 （角田 2009: 101)[例を一部省略]

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追及	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す/壊す/温める	叩く/蹴る/ぶつかる	See/Hear/見つける	Look/Listen	待つ/探す	知る/分かる/覚える/忘れる	愛す/惚れる/好き/嫌い	持つ/ある/似る/欠ける	出来る/得意/強い/苦手

表 1 は角田 (2009: 101)が提示した二項述語の階層である。この階層は意味上、左に近い方が動作を意味しており、右に近い方が状態を意味する。そして、述語が必要とする項の格配列は、1A

に必ず他動詞格枠組み[2]が現れ、右に行く程出なくなる傾向がある。この傾向はティディム・チン語においても当てはまる。

(10) *a¹maʔ³ *(in³) tua² tʰou³ tʰat³*
3SG ERG DEM ハエ 殺す I
「彼はハエを殺した。」

(11) *a¹maʔ³ (in³) loːm²nuː¹ nei³*
3SG ERG 恋人 持つ I
「彼に恋人がいる。」(Lit. 彼は恋人を持っている。)

例文(10)では、述語 *tʰat³*「殺す」は表 1 における 1A にあたる。この類の述語の目的語が受ける影響は最も強いため、通言語的に他動詞格枠組みが現れるとされる (角田 2009)。ティディム・チン語においても、能格標識がこの文では必須である。述語が選択する二項がいずれも人間の場合は、6「関係」から、例文(11)が示すように、能格標識が選択的になる。

筆者の聞き取り調査による示差的主語標示と受影性および有生性との関連性は以下のようにまとめられる。3.1 節が示したように、ティディム・チン語の示差的主語標示現象は項の有生性にも関わるため、今回の調査では主語を人間、非人間有生物、無生物の場合、目的語が有生物と無生物の場合それぞれ分けて聞き取りをした[3]。

表 2 二項述語の階層と有生性（*in³*: 能格標識が義務的、(*in³*): 能格標識が選択的）

類		1		2		3	4	5	6	7
項		直接影響		知覚		追及	知識	感情	関係	能力
主語	目的語	1A	1B	2A	2B					
人間	有生物	*in³*	*in³*	*in³*	*in³*	*in³*	*in³*	*in³*	(*in³*)	N/A
人間	無生物	*in³*	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)
非人間有生物	有生物	*in³*	*in³*	*in³*	*in³*	*in³*	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	N/A
非人間有生物	無生物	*in³*	*in³*	*in³*	*in³*	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)	(*in³*)
無生物	有生物	(*in³*)	(*in³*)	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
無生物	無生物	(*in³*)	(*in³*)	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A

表 2 は示差的 A 標示の現象と二項述語の階層および有生性の関係を表している。この表から以下のことが観察される。

まず、角田の二項述語の階層によれば、階層の左側に他動詞格枠組みが現れやすく、右に行けば行くほど、現れにくい。ティディム・チン語で類 1A に当たる例 (10) では、主語は能格、目的語は絶対格によって標示されているため、能格―絶対格をティディム・チン語の他動詞格枠組みとする。本稿の調査結果において、他動詞格枠組みが現れやすい傾向を義務的な能格標識が現れる場合が多いこと、他動詞格枠組みが現れにくい傾向を随意的な能格標識が現れる場合が少ないことだと解釈すれば、角田の階層の予測する通りとなる。

また、3.1 節の結論と照らし合わせて、主語が無生物である場合を除けば、主語の有生性が一定の場合、目的語が無生物であれば、目的語が有生物の場合に比べて能格標識の省略が起こる場合が多いことがわかる。一方、目的語が有生物の場合、人間の主語に比べて、非人間有生物の主語の方が能格標識の省略が起こる場合が多い。一方、目的語が無生物の場合、非人間有生物主語に比べて人間の主語の方が主語標示の省略が起こる場合が多いことがわかる。

このように、ティディム・チン語において、目的語の受影性が弱ければ、随意的な能格標識がよりよく観察されることが示された。

[2] 「他動詞格枠組み」とは、原型的他動詞あるいは原型的他動詞文（一般的に他動詞と他動詞文と呼ばれるもの）が取る格枠組みのことである（角田 2009: 110）。
[3] 今回のデータはチンガイリャン氏の内省によるものであるが、世代間の差もあると見られる。

3.3. 意志性

さらに、ティディム・チン語では、目的語の受影性が強い他動詞文でも能格標識が随意的な場合がある。なぜなら、意志性の有無も示差的主語標示と関わっているからである。

(12) *kei¹* **(in³)* *tua²* *buːŋ²* *su³-sia¹*
1SG ERG DEM 箱 磨く I-悪い I
「私は（意志的に）その箱を壊した。」

(13) *kei¹* *(in³)* *tua²* *buːŋ²* *su³-sia¹ xaː¹*
1SG ERG DEM 箱 磨く I-悪い I うっかり I
「私はうっかりその箱を壊した。」

例文(12)で行った動作は *su³-sia¹*「壊す」(1A) のため、角田の二項述語階層によれば目的語が受ける影響が強い。従って、動作主が箱を壊す意志を持っている、もしくは意志性を明示していない場合は、能格標識を外すことができない。しかし、例文(13)で示すように、無意志に箱を壊してしまった場合、「うっかり～をする」を意味する助動詞 *xaː¹*をつけるが、同時に能格標識も随意的になる。

ただし、意志性を帯びない他動詞文においても、有生性がある程度影響を与える。

(14) *ʔkei¹* *lian³* *tʰat³* *xaː¹*
1SG PN 殺す I うっかり
?「私はうっかりリャンを殺した。」

例文(14)では、目的語は人間の *lian³*である。この場合、例文(12)(13)と同じ階層にある *tʰat³*「殺す」(1A) であっても、能格標識をつけない文は非文にならないが、許容度が下がる。

4. 議論

3 節では、ティディム・チン語の示差的 A 標示は 3 つのパラメータ、つまり有生性・受影性・意志性によって影響されることを説明した。これらの要因は相互に絡み合い、単独の要因で A の標示を決定するようなものではない。しかし、いずれのパラメータも Hopper & Thompson (1980) が定義した他動性のパラメータである。さらに、これらのパラメータが高い他動性を表している場合に、義務的な能格標識が現れる場合が多い。この議論を表 3 にまとめることができる。

表 3 示差的 A 標示と他動性

	他動性が高い＝義務的な能格標識が現れる場合が多い	他動性が低い＝随意的な能格標識が現れる場合が多い
(a) 有生性	目的語が有生物	目的語が無生物
(b) 受影性	目的語が受ける影響が強い	目的語が受ける影響が弱い
(c) 意志性	主語に意志性がある	主語に意志性がない

まず、Hopper & Thompson (1980) によれば、有生性の高い目的語を持つ他動詞節はより高い他動性を持っている。表 2 ではこの傾向をも示している。特に二項述語の類が 1B-5 の間なら、同一の二項述語であっても、目的語が有生である場合、能格標識が義務的なものの、目的語が無生物である場合、能格標識が選択的になる場合が多い。

次に、他動詞節の他動性が高い場合、目的語が受ける影響の程度、つまり受影性が強くなる。強い受影性につれて能格標識も義務的になる。角田 (2009) が提案した二項述語階層に従えば、より動作に近い二項述語は他動詞的枠組みを表し、より状態に近い二項述語は現れにくくなる。ティディム・チン語の傾向は表 2 から受け取れるが、角田 (2009) の提案を支持している。

さらに、高い他動性は高い意志性を伴うが、意志性がない場合、能格標識が選択的になりやすい。例 (13) が示したように、目的語の受影性が高い場合でも（ここでは、述語は 1A クラスの

「壊す」)、意志性を伴っていなければ、能格標識は選択的になり、意志性を伴っているもしくは明示されていない場合は義務的になる。

Hoop & Malchukov (2008) では、示差的項標示に、弁別機能と同定機能が働くと主張したが、ティディム・チン語には二つの機能が同時に存在する。弁別機能とは、他動詞節の二項を区別する機能であり、同定機能は項の内在的特質を記号化する機能である。ティディム・チン語の示差的 A 標示では、目的語が有生であるほど能格標識が義務的になるため、弁別機能の働きが観察される。また、目的語の受影性が強いほど、また A の意志性が強いほど、能格標識が義務的になる場合が多いため、同定機能の働きも見られる。このように、ティディム・チン語の示差的 A 標示は複雑なメカニズムによって駆使されている。

まとめると、ティディム・チン語の示差的 A 標示は 3 つのパラメータによって影響されるが、いずれも他動性によって説明することができる。つまり、節の他動性が高ければ、A 標示が義務的である場合が多く、一方、節の他動性が低ければ、A 標示が選択的である場合が多い。一方、その背後には同定機能と弁別機能が両方働いていることは示差的 A 標示の複雑性を示している。

5. まとめ

ティディム・チン語の能格標識は主語と目的語の有生性、目的語の受影性と主語の意志性によって選択的になる場合もある。これらのパラメータは絡み合って A 標示に影響を与えるが、他動詞節の他動性が高い場合、A 標示が義務的になる場合が多く、他動性が低い場合、A 標示が選択的になる場合が多い。さらに、ティディム・チン語の能格標識は弁別機能と同定機能の両者が関与していることが示され、その背後にあるメカニズムの複雑さが覗かれる。

略号一覧

1: 1st person, 3: 3rd person, ¹: tone 1, ²: tone 2, ³: tone 3, -: morphological boundary, =: Clitic boundary, I: form I, II: form II, C: consonant, CONJN: conjunction, dem: demonstrative, DIR: direction, ERG: ergative, PN: proper noun, SG: singular, T: tone, V: vowel.

参考文献

Beavers, John (2011) On affectedness. *Nat Lang Linguist Theory* 29: 335-370.／**Chelliah,** Shobhana (2017) Ergativity in Tibeto-Burman. In Jessica Coon, Diane Massam & Lisa Demena Travis (eds.), *The Oxford Handbook of Ergativity,* 924-947. Oxford University Press.／**Eberhard,** David M., Gary F. Simons & Charles D. Fennig (eds.) (2021) *Ethnologue: Languages of Asia.* 24th edition. Dallas: SIL International. ／**Hopper,** Paul J. & Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56 (2). 251-299. ／**Hoop,** Helen de & Andrej L. Malchukov (2008) Case-Marking Strategies. *Linguistic Inquiry* 39 (4). 565-587. ／西田龍雄（1989）「チン語支」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典 世界言語編(中)』 2: 995-1008. 東京：三省堂. ／大塚行誠 (2011) 『ティディム・チン語（ミャンマー連邦）の文法記述』博士論文，東京大学. ／**Otsuka,** Kosei (2014) Tiddim Chin. *Grammatical Sketches from the Field* 2. 109-141. ／**Tsunoda,** Tasaku. (1985) Remarks on Transitivity. *Journal of Linguistics* 21 (2). 385-396. ／角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 : 言語類型論から見た日本語』改訂版. 東京：くろしお出版／**Witzlack-Makarevich,** Alena & Ilja A. Seržant. (2018) Differential Argument Marking: Patterns of Variation. In Ilja A. & Alena Witzlack-Makarevich Seržant (ed.) *Diachrony of Differential Argument Marking,* 1-40. Berlin: Language Science Press.